

米国における法学教授法の発展

マイケル・ジェイ・デイル¹⁾

沖崎 聰 (訳)

I. はじめに

米国の法学教育において、劇的な変化がロースクールと法律実務家の間の双方で起きています²⁾。ソクラテス・メソッドあるいはケース・メソッドとして知られる、米国における法学教育に対する1世紀半におよぶ単一的アプローチの後³⁾、二つの重要な変化が起きましたし、さらに多くの変化がもたらされることでしょう。最初の、あまり大きくない変化が1960年代に始まりました。2番目の、はるかに劇的な一連の変化が20世紀末に起こり、今日、加速度的に継続しています。これらの変化は、米国の法学教育においておそらく前例のない速さで起こっており、それらを推進しているのが、ITの急激な成長、米国の市場原理、ロースクールの新入生たちの価値観や期待の変化、法律実務の国際化といった一連の動きなのです⁴⁾。本稿では、最新の米国における法学教育技法考察の土台として、

- 1) 本稿の執筆を助めていただいた名古屋大学大学院法学研究科の藤本亮教授に謝意を表す。NITA 講師のジョリー・ヤングス [Joleen Youngers] ニューメキシコ州弁護士とともに2015年6月に熊本と東京で講演するための資金を提供いただいたPSIMコンソーシアムに感謝する。本稿はそれらの講演にもとづくものである。同僚のNITAのプログラム開発教材部長、マーク・コールドウェル氏にも感謝する。デンバー大学スターム法科大学院非常勤教授でコロラド州地方裁判所判事のロバート・マックゲヒー氏、長年のNITA講師であるジョリー・ヤングス氏、NITA講師でフロリダ州弁護士のジェームズ・ズロック氏 [James Zloch] には本稿の執筆にあたって助言いただいたことを感謝する。
- 2) Blake D. Morant, "Benefits from Challenge: The Continued Evolution of American Legal Education," 64 *Journal of Legal Education* 523 (May 2015).
- 3) Ralph Michael Stein, "The Path of Legal Education from Edward I to Langdell: A History of Insular Reaction," 57 *Chicago-Kent L. Rev.* 429, 448-53 (1981).
- 4) Morant, *supra* note 2. モラント学部長は、David Thompson, *Law School 2.0: Legal Education for a Digital Age*, 11-24 (2009) を引用して、これらの出来事を「パーフェクトストーム」と呼ぶ。

米国の法学教育に対する歴史的アプローチを簡潔に概観するとともに、より最新の、かつより革新的な教育方法論について、それらが米国外においても法学教育での使用が検討されることを期待して、概観したいと思います。

II. 米国における伝統的アプローチ ーソクラテス・メソッドあるいはケース・メソッド

米国の法学教育において標準とされている様式は、18世紀に行われるようになり、英国を起源としています。それは、「法を読む [reading the law]」というプロセスを通して、ロー・クラークや実習生を法律実務家に鍛え上げるというコンセプトのものでした⁵⁾。米国では、ロー・クラークはコモン・ロー体系の中で教育されましたし、法律家は今日、一般的に、そうした英国のコモン・ロー体系の応用をベースとする教育体系で訓練されています。

米国における最初で、今日に至るまで最も重要な教育的進展は、法を教えることに関する「ソクラテス・メソッド」や「ケース・メソッド」の導入でした。それは、1870年代にハーバード大学ロースクールの法科大学院長であったクリストファー・コロンブス・ラングデル [Christopher Columbus Langdell] によって開発され、最初に使われました⁶⁾。学生は、判例集に掲載された上訴審の裁判官の意見を詳しく調べ、契約法、不法行為法、財産法などの特定の法領域の科目で、裁判官の判断の事実上および法律上の根拠に関して、教授から授業で質問されました。こうした教育法は、今日も米国における法学教育制度の中心ですし、ハーバード・ロースクールの1年生を描いた「ペーパー・チェイス [Paper Chase]」という題名のジョン・ジェー・オズボーン・ジュニア [John J. Osborne, Jr.] による1970年の小説や [それを原作とする] 映画やテレビ・シリーズのテーマにもなっ

5) William B. Stoebuck, "Reception of English Common Law in the American Colonies," 10 William & Mary L. Rev. 393, 413-415 (1968); Dawson M. Douglas, "Citizen Lawyers: Celebrating the Nation's First Law School," 76 William & Mary Alumni Magazine 1, 48 (Winter 2008); Brian J. Moline, "Early American Legal Education," 42 Washburn Law Journal 775 (2003).

6) Stein, *supra* note 3.

ています。しかしながら、ソクラテス・メソッドに対しては、より新しい教育法が、とくにロースクールの第2年次と第3年次において追加的に導入されています。

法律実務家には、三つの主要な変化が20世紀の後半に起こりました。1番目の、「CLE」あるいは法曹継続教育〔Continuing Legal Education〕として知られるものは、1900年代の導入以来あまり進化しておらず⁷⁾、講義形式で提供され続けていて、しばしば「トーキング・ヘッド〔talking heads〕」⁸⁾とも呼ばれています。2番目の変化は、多くの州が法曹継続教育をライセンス継続の要件としたときに起こりました。第3の、そしてはるかに重要な変化は、1974年に全米法廷技術研修所〔National Institute for Trial Advocacy、以下、NITA〕によって導入され、「実践的学習〔learning by doing〕」モデルとして知られているものです⁹⁾。

III. ソクラテス・メソッドに代わる方法への最初の試み

米国の法学教育には、少なくとも四つの主要な変化が1960年代と70年代に生じました。おそらくは、ベトナム戦争に対する国民の反対と公共心にあふれたロースクールの学生の数の増加に一部影響を受け、ハーバードを含む各ロースクールは、ロースクール・クリニック、リーガル・リサーチとリーガル・ライティングの授業、法廷技術科目、そして二つの全国模擬裁判コンテスト（全米とジェサップ〔the Jessup〕）をこの時代に導入しました。

しかしながら、この時代における最も重要な新機軸は、1974年にNITAによって開発された「実践的学習」教授法のモデルでした。そのモデルは、模擬裁判で証人尋問の一部を行ったり、冒頭陳述や最終弁論を行ったりす

7) Herschel H. Friday, "Continuing Legal Education Historical Background, Recent Developments, and the Future," 50 St. Johns L. Rev. 502 (1976).

8) メリアム・ウェブスター辞典〔Merriam Webster Dictionary〕は、「トーキング・ヘッド」を「テレビ番組で情報を提供したり、意見を述べる人物で、その頭部と肩がテレビ画面に現れる」と定義している。

9) NITAとそのコース、出版物、歴史の詳細については、NITAのウェブサイト NITA.org を参照。

る「参加者」（法律実務家かロースクールの学生のいずれか）を教員が評価するという形式のものです。こうした演習は、多くは2日以上続くプログラムの間に行われます。「評価 [critique]」は高度に構造化された教育技法のことを表します。次章で述べるように、NITA 式の評価は、より実務にもとづいた法学教育に向けての米国における動きにおいて、中心的な教授方法であり続けています。それは、参加者の3分から10分の尋問や弁論の終わりに、迅速で、明白かつ簡潔なフィードバックを実務家や学生に提供するものです。

IV. 現代的技法－20世紀末と21世紀における新機軸

A. 概観

今日、米国のロースクールには、学生に対する教育をより実践的なものとするよう大きなプレッシャーがかかっています。米国の弁護士、とりわけ大規模法律事務所働く弁護士にも、アソシエイト（若手弁護士）の実務技能を高めることへのプレッシャーがあります。その結果、ロースクールでは、洗練された実務科目を含む、法学教育への新しくかつ変化した教室内アプローチを導入しています。こうした最近の動きは、自らを実務家というよりは研究者とみなし、伝統的なソクラテス・メソッドで教育を受けた教員たちからの抵抗にあってきました。これらの変化に関する最近の注目すべきワードは「体験的教育 [experiential education]」です。この言葉は、2007年の法曹教育に関するカーネギー財団 [Carnegie Foundation] の報告書において造り出されました¹⁰⁾。カーネギー報告書は、先に出された1992年のマックレート報告書 [McCrate Report] と同じく、より実践的な法学教育の必要性を論じました¹¹⁾。雇用機会の減少とロースクール志願者の減少によってもたらされたごく最近のプレッシャーにより、ロースクールは教育技法における変化を実行に移すことを強いられています。NITAのような団体も米国の法学教育の状況における変化に応えようと努

10) William M. Sullivan, et al., *Educating Lawyers: Preparation for the Profession of Law* (2007).

11) ABA Section of Legal Education and Admissions to the Bar, *Legal Education and Professional Development - An Educational Continuum: Report of the Task Force on Law Schools and the Profession: Narrowing the Gap* (1992).

めてきました。NITA は法律実務家教育に重点を置っていますが、その影響力はロースクール教育においても重要なものとなっています。

B. 具体的な教育方法

それではこれらの革新的技法とは何なのでしょう？最初の主要な変化は、実際のところその大部分が NITA と、1970 年代後半にもともと NITA が開発した技法を源流とする現在進行中の一連の[教授法の]展開と関わっています。しかしまた、その多くがリーガル・リサーチとリーガル・ライティングの授業やクリニックを教えているロースクールの教授たちもその展開の源流にいます。

過去 10 年間、NITA は申立て手続に関する実務、事実の収集、調停、起案、面接技法や教員養成において新しいプログラムを導入しています。これらはすべて、基礎および上級の法廷実務、デポジション、専門家証人のデポジションにおける NITA の長期にわたるプログラムに加えてのもので、NITA の教材作成者は、実践的学習法の基礎となる仮想の事件ファイルを作り続けています。ロースクールの授業や NITA のトレーニング・プログラムで通常使用される事件ファイルは、刑法、国内および国際的な商事紛争、雇用差別、家族法、少年法を含む範囲の法領域を扱っています。NITA の教材作成者は、さまざまな訴訟の領域においての実務家向けテキストを作成し続けています。NITA は現在、オンライン形態でのプログラムも提供しています。実践的学習法に [よるプログラムに] 加えて、参加者がライブのプログラムの前後やその間に技法を見ることができるよう、ビデオ録画された実演と講義のシリーズも開発してきています。これらのオンライン教材は、公判とデポジションの両方の技能をカバーしています。こうしたオンライン教材の使用により、NITA のライブの実践的学習プログラムの間に、より多く実技の時間をとることが可能となります。NITA では、教育学の技法として、より多くの実技の反復は参加者の技能習得力を高めるとともに自信を育むと考えています。NITA は、特定の訴訟の問題について定期的にウェブ放送を提供しています。2 か国語（スペイン語）形態でプログラムを教える方法や、公判やデポジションでの通訳の利用に関しての弁護士の訓練法についても検討しているところです。

しかしながら、NITA の実践的学習法がいつそう洗練されたものになるにつれて、最も重要な進展が生じました。そのアプローチの中心は、参加者にNITA の事件ファイルの仮想の争いで証人の尋問をさせることです。この実技は、6人から8人の参加者と2人の講師がいる部屋で行われます。各講師は、各参加者の尋問が終わり次第、参加者にヘッド・ノート [head note] (批評のトピック)、再生 [play back] (参加者が実際に話したこと)、処方的指導 [prescription] (実技の問題点をいかに解決するか の提案)、そして理由の説明 [rationale] (提案された修正の理由) の4つの部分でワンポイントの評価を行います。こうした設定で、参加者は、主尋問と反対尋問、冒頭陳述、最終弁論、申立ての主張、面接技法、ストーリーテリング、証拠物の提出、交渉術などの特定の技能を練習し、繰り返し行うのです。

NITA は、ニューヨークとサンフランシスコでそれぞれ1回ずつ、年に2回、教員養成プログラムも開催し、NITA 式教授法を学んでいる教授や弁護士 の参加者に対して建設的批評の方式を用いています。それは、参加者教員が模擬参加者 (通例は現地のロースクールの学生) を評価し、交替に、参加者教員が自分たちの評価についての改善提案を受け取るという循環式のプロセスです。NITA は、教員養成についてのこうしたプロセスを30年以上前に始めました。最後に、伝統的に多くのNITA 講師がロースクールの教授です。その結果、NITA の実践的学習法は、米国の多くのロースクールでごく当たり前 [の教育方法] になっています。

NITA は、実践的学習法を補強するために補助的技法を開発しました。ビデオ・レビューの利用がその例です。参加者の実技は、NITA のプログラムの間に、小グループによるライブの実践的学習セッションで評価され、録画されます。参加者たちは次に、「再生」室で2番目の講師に会います。そこでは録画を使って自らの実技を見るときともに、講師によって再び評価されます。この2番目の評価は、参加者のプレゼンテーションのスタイルに焦点をあてるものです。テクノロジーの進歩により、受講者たちは自分たちの実技を録画するためにタブレットやスマートフォンを使い、それをビデオ・レビューの部屋の講師に持っていくことができるようになりました。ほかのテクノロジーの進歩においてと同じく、新しい情報機器が記録

メディアやノートパソコン、カメラなどにとって代わるにつれ、サウンドと画像の容量の問題を解決する必要があります。ロースクールの教授たちは類似の技法を法廷技術の授業で使っています。

もう一つのツールは反復練習を用いることです。技能が習得されるまで繰り返して行われる、スポーツのトレーニングに似たプロセスです。反復練習形態の一つの例が「コンガライン [conga line]」です。ここでは、受講者が非常に簡単な尋問、一つの質問をし、別の受講者が次の質問で続きます。これらすべては、筋肉の記憶 [muscle memory]、より正確には、意識することなしに実践できるレベルで身についた技能を生み出すために行われるのです。NITA のマーク・コールドウェル [Mark Caldwell] によって開発されたもう一つの方法が「コーチング・ルーム [coaching room]」です。特定の技能に取り組みたい受講者が、この目的のために用意された部屋にいる講師に課題を持ち込み、プログラムの進行中、その技能に取り組むことができます。このプロセスは、弁護技能が習得されるまで繰り返し行われるよう、スポーツにおける身体トレーニングをメンタルに再現するものです。NITA のプログラムで時おり用いられる別の技法は「振り返り [reflections]」と呼ばれるプロセスです。その技法は、プログラムの間、毎日最後のセッションで主任講師によって用いられます。主任講師は、各受講者が学んだ最も重要な点が何であったかを単に尋ねることによって、受講者たちが他の受講者から学んだことに肉付けするのです。この技法は、成人の学習原理を呼び起こして、参加者に、学んだものは何か、そして今後それを受講中のプログラムの中での実技で、また、実務に戻って実際の弁護活動をする際のパフォーマンスにおいてどのように応用するのかを考えてもらうことにより記憶を高めることを可能にするのです。加えて、NITA は、参加者にプログラムから何を持ち帰るかに焦点を当てさせるためのさらなる手段として、書面による学習目的と目標の立案をプログラムの中に取り入れています。

アメリカの法学教育における第2の最近の主要な変化は、教室におけるテクノロジーの使用が著しく増えたことに関連します。教授たちは、もはや単純にパワーポイントのようなプレゼンテーション用ソフトウェアの使

用に重点を置くのではなく、スクリーン上に情報を置き、それを詳細に分析します。すべてのロースクール生がノートパソコンのような電子機器を持っており¹²⁾、それを使って教授とともに起案し、投票によって質問に答え、教授の求めに応じて情報を検索することができます。課題はいつも電子的に提出されます。教授たちは学生の宿題を電子的に、あるいは手書きで評価する時間を増やしています。実際、米国のロースクールでは、伝統的な学期末の筆記の最終試験によるだけでなく、それを超えて評価しているという動きがあります。

米国の法廷においてはテクノロジーが進歩しているため—その大多数はネットワーク化されている—、法廷技術の授業の学生は、電子スクリーンを通して展示証拠を示し、電子媒体によって証拠物件を提出し、裁判所に提出するすべての書類を電子的に提出することを学びます。学生たちは、公判前手続に関する講義科目においてだけでなく、法廷技術の科目においてもこれらの技能を実習するのです。

米国の法学教育における3番目の主要な変化は、法曹倫理、民事訴訟法、法廷技術のような科目において、映画やテレビからのクリップの使用が増えているということです。たとえば、この分野でのリーダーは、デンバーのコロラド州地方裁判所のロバート・エル・マックゲヒー・ジュニア判事 [Judge Robert L. Mcgahey, Jr.] です。マックゲヒー判事はデンバー大学スターム法科大学院 [University of Denver Sturm College of Law] の非常勤教授 [adjunct professor] であり、NITAの講師でもあります。NITAでは映画に関するブログを定期的書いておられます。ロースクールにおいては、マックゲヒー判事の司法エクスターンシップのセミナーで、学生も毎週、実務上のトピックをブログに書いています。授業では、倫理的問題を提起するため、「或る殺人 [原題: Anatomy of a Murder]」のような映画を見せます。彼と彼の同僚のNITAプログラム開発教材部長であるマーク・コー

12) 授業でノートを取るのに、手書きよりもノートパソコンを使うことの有効性についての永遠の問題がある。Robin H. Kay & Karen Lamnicella, "Exploring the Benefits and Challenges of Using Laptop Computers in Higher Education Classrooms: A Formative Analysis," 37 Can. J. Learning & Tech. 1 (2011).

ルドウェルは、公判手続の技能と倫理的な問題や技法を教えるために、「アラバマ物語 [原題: To Kill a Mockingbird]」のような映画やテレビのクリップを用いています¹³⁾。

第4に、リーガル・リサーチとリーガル・ライティングを教えているロースクールの教授たちは、テクノロジーを活用し、伝統的な米国の教授法の現代化を大きく推し進めています。それは非常に実務型の教育領域です。これらの教授たちの多くはテクノロジーの利用の最前線におり¹⁴⁾、プレゼンテーション用ソフトウェア、スライド、双方向のコンピュータ授業、起案と再起案、模擬口頭弁論、コンピュータによるリサーチの授業、そしてグループ・プロジェクトを用いています。彼らは定期的に会合をもち、トレーニングを行い、この分野での指導的な専門雑誌である、全米法科大学院協会 [Association of American Law Schools] の「法学教育雑誌 [Journal of Legal Education]」に新しい技法についての非常に多くの論文を掲載しています。

最後に、ロースクールのクリニックが拡大しています。多様な分野でのクリニックの提供が増え続けています。最新の動きとして、援助を必要とする人々のための退役軍人クリニック [Veterans Clinics] の展開があります。家族法、消費者法、刑法、行政に関するさまざまな事柄を含む多様な

13) 法律を扱う米国映画の詳細リストについては、Thane Rosenbaum, "Why the Movies Love Lawyers," *American Bar Association Journal*, 36-45 (August 2015) を参照。法律を題材とする他の国々の映画は、それらの国々のロースクールにおける授業において使われる。例として、Japan: *Rashomon* (1950) and *Seven Samurai* (1954), both directed by Akira Kurosawa. Czech Republic: *ex officio* (1999), TV movie directed by Jaromír Polišmský; *případ dr. Horákové* (the Case of Dr. Horáková) (1990), directed by Jan Mudra. Spain: *Queridísimos Vedrugos* ("Dear Executioners") (1973), directed by Basilio Martín Patino; *No Habrá Paz Para Los Malvados* ("There Will Not be Peace for the Evil Ones") (2011), directed by Enrique Urbizu; *Mar Adentro* ("The Sea Inside") (2004), directed by Alejandro Amenabar. France: *Le Juge et L'Assasin* ("The Judge and the Killer") (1975), directed by Bertrand Tavernier. Italy/France: *Il Testimone/Le Temoin* (1978), directed by Jean-Pierre Mocky. Italy: *L'Avvocato de Gregorio* (2003), directed by Pasquale Squitieri; *Sacco e Vanzetti* (1971), directed by Giuliano Montaldo. Ireland: *In the Name of the Father* (1993), directed by Jim Sheridan. Brazil/Holland: *Justice* (2004), directed by Maria Augusta Ramos.

14) James B. Levy, "Teaching the Digital Caverman: Rethinking the Use of Classroom Technology in Law School," 19 *Chapman L. Rev.* (forthcoming 2015).

領域において、米国軍人を助けることを目的とするクリニックです。リーガル・リサーチとリーガル・ライティングの教授たちと同じく、クリニックの教授たちも定期的に会合をもち、その分野で執筆しています。

V. 結論

米国の法学教育が劇的な変化を経験していることは明らかです。ソクラテス・メソッドやケース・メソッドは常に米国の法学教育の要であり続けるでしょう。米国のロースクール生たちにコモン・ローを基礎とする米国の法制度の中で考える方法をうまく教えられるやり方に思えるからです。よく耳にする決まり文句は、「弁護士のように考える」ことを学んだ、ということ¹⁵⁾。

しかしながら、テクノロジーのグローバル化と市場原理が、米国の法学教育をより実践的で、法曹界の要求により応えるものとする取り組みを推進しています。米国のロースクール生たちは、ロースクールを卒業するときには「実務につく準備ができています」ことが、ますます必要となってきたのです。法律事務所や政府機関に入ってから実務の方法を学ぶという日々は過去のものです。もし、その準備がまだできていないのなら、同じプレッシャーが国際的にも生じるかもしれません。したがって、学生たちが専門的スキルを手中にして実務に入ることを可能にする教授法を用いることは、世界中のロースクールの教授にとって必要なことなのです。

15) この表現についての最も有名な例が映画「ペーパー・チェイス」に出てくる。典型的なソクラテス・メソッドのアプローチをとるキングスフィールド教授 [Professor Kingsfield] は言う。「君たちは、おかゆのような柔^{やわ}な頭で入学してきたが、弁護士らしく考えられる頭になって卒業するんだ」。